温故知新 北海道大学

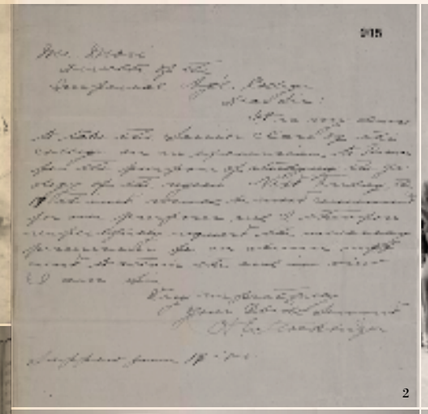
# 挑戦の140年

SCENE-6

## 1885-1907

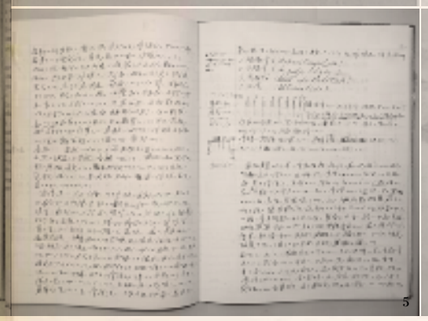
## 「修学旅行」

1

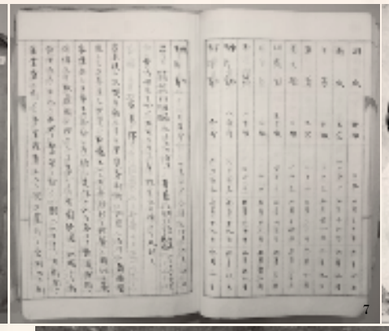

2

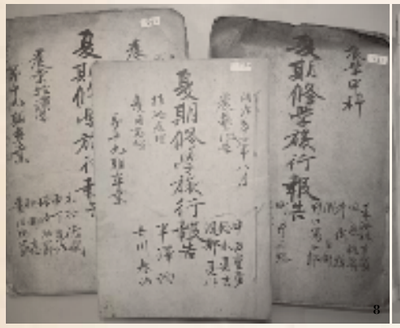
3

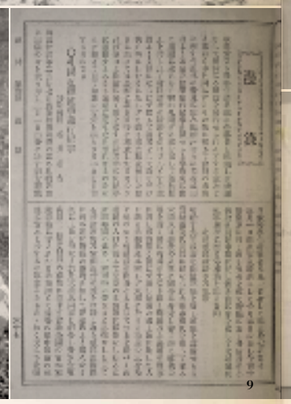
4


5

6


7


8


9

10

1. 札幌農学校第十期生、前列右端が角田啓司（1891年 大学文書館蔵）
2. ストックブリッジの地質学実習旅行許可願（1885年 附属図書館蔵）
3. 鉱山見学修学旅行の報告書（1894年 大学文書館蔵）
4. 日高地方修学旅行の行程図（1899年 大学文書館蔵）
5. 札幌農学校講師角田啓司講義「造林学」受講ノート（1897年 大学文書館蔵）
6. 動物学修学旅行一行（1901年頃 植物園蔵）
7. 角田啓司「旅行復命書」（1890年 大学文書館蔵）
8. 札幌農学校の修学旅行報告書（1901年 大学文書館蔵）
9. 『蕙林』第1号掲載の「修学旅行紀事」（1892年 大学文書館蔵）
10. 植物・昆虫採集旅行記念（1897年頃 大学文書館蔵）

### 修学旅行のはじまり

日本で最初の修学旅行は、栃木県立第一中学校が一八八一年に行なった上野の内国勧業博覧会見学とする説がある。また、一八八六年に東京師範学校（現筑波大学）が実施した「長途遠足」が嚆矢とする説もある。東京師範学校の「長途遠足」については、『大日本教育会雑誌』が旅程の詳細を紹介している。二月十五日から二十五日にかけて九十九名の生徒が東京と銚子を往復、軍装・銃器携帯の行軍形式で習志野練兵場に滞在して兵式練習を実施する一方、途中で気象観測、植物採集、学校見学なども実施した。師範学校は教員養成を目的としていたため、兵式による集団行動訓練と学科演習を兼ねた教育プログラムとして実施したと考えられる。翌年には「修学旅行」の名称も登場し、全国の学校に普及していった。

### 札幌農学校のフィールドワーク

一方、札幌農学校では、初代教頭W・S・クラークが頻繁に第一期生を引率して野外採集へ出かけた。一八七七年一月には手稲山への雪中登山を敢行し、新種の地衣類（クラークゴケ）を採集した。

クラーク離任後の一八七七年夏休みには、農学校生が三手に分かれ、三名の外国人教師がそれぞれの一団を引率し、石狩川上流遡行、室蘭・長万部・岩内方面への植物・鉱物調査、黒松内道路線測量の野外実習旅行を実施した。農学校ではこうした野外実習旅行をその後も度々実施した。それとは別に外国人教師が開拓使や北海道庁などから委嘱を受けて地質や土質、植生などの調査をする際に、農学校生が随行することも多かった。さらに、夏休みなどを利用して農学校生個々人が頻繁に調査・見学旅行を行なった。札幌農学校では開校以来、フィールドワークを重視する校風が形成されていた。

こうした校風を背景として、札幌農学校で修学旅行が定例行事化するのは一八八五年頃である。

### 一八九〇年の石狩・空知地方農況視察

第十期生角田啓司は総代として一八九〇年六～七月に実施した旅行の記録を「旅行復命書」として校長に提出している。札幌農学校の修学旅行の詳細な旅程が分かる最初の記録である。

このときは、南鷹次郎教授などが引率して石狩・空知地方の農況視察を行なった。六月二十一日早朝に汽車で札幌駅を出発した学生たちは、頭を悩ました学期試験を終えたばかりとあり、鬱憤晴らしとばかりに「山ヲ跋ミ川ヲ渉リ雨ニ沐シ風ニ櫛ルヲ以テ学生ノ一大快事トシ好テ険ヲ冒サントスルノ風アリキ」（山を歩き川を渡り雨に濡れ風に吹かれる労苦を痛快な楽しみとして、敢えて冒険を望む心持ちであった）という。汽車・舟・馬・徒歩で、七月七日までの十七日間、札幌から江別に至り、石狩川に沿って当別・月形・新十津川・音江法華（深川）を通って上川原野（旭川周辺）まで至り、石狩川左岸の内陸を空知太（砂川）・市来知（三笠）・岩見沢・夕張と回って札幌に帰着した。

各地の戸長役場や農家などで地勢・作況・経営・生活状況等の聴き取りをし、篠津の屯田兵村、新十津川の集団移住地、三条実美らが所有する巨大な雨竜農場などを見学し、原野では地形・土質・地味などを調査した。雨竜農場では現地の監督責任者である柳本通義（第一期生）と町村金彌（第二期生）、北海道庁で殖民地撰定・区画を担当する内田瀞（第一期生）と会談し、農学校卒業生の仕事を目の当たりにした。

### 札幌農学校の「修学」旅行

角田は「旅行復命書」のまとめとして「農家教育ノ普及」と「農業試験場設置ノ必要」を論じている。また、「農業ハ実用ノ学ニシテ理ヲ研究スト雖トモ実際ニ当リテ応用ノ術ヲ学フニ非ズンハ其功効ヲ致スコト甚タ難矣」（農業は実用の学問であって理論を研究しても実際に応用する方法を学ばなければ効果を上げることは難しい）、「生等農業視察ノ為メ旅行ヲ命セラル依テ応用ノ術ヲ学ヒ即チ土地ノ肥瘠山河ノ配置水利ノ便否作物ノ適否農家ノ実況ヲ熟知スルノ好期ヲ得タリ」（私たちが農業視察のために旅行を命ぜられ、応用の方法を学ぶ、即ち土地が肥沃か不毛か、山や川の地形、水利の便不便、作物の適不適、農家の実況を熟知する好機会を得た）と述べている。

札幌農学校の修学旅行は師範学校とはやや異なるルーツを持ち、農学校における勉学に直結していた。旅行中の見聞・調査はそのまま生の教材となって農学校の講義を実質化し、仕事に従事する卒業生の姿は農学校生自身の将来を実像化する貴重な機会であった。正に「修学」旅行であったと言える。札幌農学校の修学旅行は「実学重視」の特徴を示す一カリキュラムとなり、帝国大学昇格後も形を変えて続いた。

「生等農業視察ノ為メ旅行ヲ命セラル依テ応用ノ術ヲ学ヒ即チ土地ノ肥瘠山河ノ配置水利ノ便否作物ノ適否農家ノ実況ヲ熟知スルノ好期ヲ得タリ」

Hokkaido University HISTORY 1885-1907

1885年 6月 - ストックブリッジが引率し幌内地方に地質学実習旅行を実施

1886年 6月 - カッターが引率し小樽・銭函に鯡漁調査旅行を実施
10月 - ストックブリッジが引率し地質学研究旅行を実施

1889年 6月 - ブリガムが引率し植物実習旅行を実施
9月 - ブルックスが引率し千歳に植物調査旅行を実施

1890年 6月 - 第9-11期生が石狩・空知地方に農況視察旅行を実施
第10期生角田啓司が「旅行復命書」を校長に提出

1892年 3月 - 第11期生が札幌近郊農業調査旅行を実施
5月 - 第11期生谷井恭吉が校友会誌『蕙林』第1号に「札幌近郊修学旅行紀事」を掲載
以降、「修学旅行」の名称と学生による報告書作成が定着

1906年 7~9月 - 報告書記録がある札幌農学校最後の修学旅行

1907年 9月 - 札幌農学校が帝国大学に昇格

**大学文書館** だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。